

小児訪問看護の課題に関する文献検討

○川元 芽（姫路市西保健センター）、椿野理恵（公立豊岡病院）、中村有美子（関西福祉大学）

I. はじめに

近年、在宅医療の機器の発達も相まって、小児の在宅療養は増加傾向にある。現在、訪問看護ステーションからの訪問看護を受ける小児（15歳未満）の利用者は増加している状況である。このことから、病院で療養していた人が在宅での療養へと移行していることが分かる。小児の多くが在宅療養へと移行していく中、在宅療養を継続するためには地域での支援体制の充実はもちろん、特に高度な医療的ケアを要するがゆえ、訪問看護による支援が重要と考える。しかし、小児訪問看護師の実施率は3割程度と報告されている（厚生労働省，2016）。以上より小児在宅療養支援において小児訪問看護が果たす役割は大きいと考えるが、小児を対象にした訪問看護は決して多くないことから、小児訪問看護を行う上で課題があると考えた。そのため、本研究では小児訪問看護の課題を明らかにし、小児訪問看護師への支援のあり方を検討することを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究デザイン 文献検討
2. データ収集方法

医学中央雑誌 Web 版（ver. 5）を用いて検索し文献検討を行った。検索ワードを「訪問看護」AND「小児」AND「課題」で検索を行った。文献の発行年はインクルーシブ教育システムの推進より、総合的な観点から医療的ケア児の就学先を決定する 2013 年度の学校教育法の改定に伴い 2013 年以降とする原著論文とした。抄録を精読し、小児訪問看護の課題以外の家族、対象児の課題について述べられている文献は除外した。

III. 結果

検索ワード「訪問看護師」1764 件、「訪問看護師 AND 小児」114 件、「訪問看護師 AND 小児 AND 課題」35 件であった。2013 年以降の原著論文で 28 件抽出された。小児訪問看護の課題について記載されていない 22 文献を除外し、最終的に 6 文献であった。

小児訪問看護の課題として、コードが 52 個抽出され、12 個のサブカテゴリーに統合された。そこから【小児特有の難しさ】【保護者との協働の難しさ】【小児訪問看護の教育体制の不足】【他機関・他職種との連携困難】【小児の社会資源の不足】の 5 つのカテゴリーに統合された。

IV. 結論

小児訪問看護の課題としては、小児特有の難しさ、保護者との協働の難しさ、小児訪問看護の教育体制の不足、他機関・他職種との連携困難、小児の社会資源の不足の 5 つがカテゴリーとして抽出された。

小児訪問看護師がより機能を発揮していくためには、互いの組織を十分に理解し、小児に対する社会資源の知識を身に付ける必要がある。今後、小児訪問看護師への支援としては、小児訪問看護に関する教育体制の提供、さらに、小児が利用できる社会資源やケア・コーディネーターのような人的資源の創設が必要であると示唆された。

V. 文献

厚生労働省, (2016), 医療的ケア児の支援に向けた主な取り組み.

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/09/1403004_001.pdf (2022. 10. 14).